



園児に向き合い、 保育園再建を実現

～保育園経営者として活躍する僧侶とは～

曹洞宗瑞岩寺 | 長谷川 俊道

開教師として、ハワイで7年半住職活動する傍ら、日本語学校の校長、各種文化クラブ(お茶・柔道・剣道・空手・カラオケ教室)を主催。帰国後は、瑞岩寺で副住職に就任するも、その傍らで保育園経営に着手。能動的な行動力があり、生身の人間に喜んでもらうため、しっかりと目の前にいる人間と向き合う僧侶がいる。

「保育園経営もそうですが、園児に向き合う。生身の人間に喜んでもらうことを常に意識しています」

そう語るのが、今回紹介する長谷川俊道(はせがわ しゅんどう)だ。お寺のHPを覗いてみると、「すべての人に佛さまの智慧と慈悲を」という理念が書かれている。

「誰のための活動というのは特にはないですよ。ご縁のある人すべてに向けて、自らを幸せに、周りの人を幸せに、そし

て円満に」そう語る長谷川俊道。

「仏教は生きるためのツールなんです」そう語る彼は、どのような活動をし、どのような人間性を持つ僧侶なのだろうか？

.....

保育園経営をする僧侶 ～園児に向き合う経営方法とは

開教師として7年半、ハワイで過ごした後、日本に帰国した長谷川。実家の瑞岩寺で副住職として就任したが、保育園の経営状況の悪さに驚愕したという。

元から経営に興味があった長谷川は、保育園再建に向けテコ入れを開始した。

「インターネットで目についた保育園が、ISO9001を取っていたんですよ。す

ぐさま連絡を取り合いに行き、やり方を教えてもらいました。

それを投入し、『顧客満足度、従業員満足度を上げましょう。園児を増やして収入を増やしましょう』としたところ、今では顧客満足度が95%まで上昇しました(当時は56%だった)」

長谷川が経営再建のテコ入れをする前、経営状況が悪かった頃は「いかに補助金をもらうか」と、お役人の方を向いて経営をしていた。補助金をもらうため、お役所の言うことばかりを聞くのではなく、目の前の園児に真摯に向き合い顧客満足度を上げることを優先した。

TVでヨコミネ式教育についての放送を見た長谷川は、興味を持ち鹿児島まで見に行ったという。

子供達にとって良いもの、効果的なものを取り入れ、保育環境の改善を積極的に行う。顧客満足度が向上した背景に



は、長谷川の弛まない努力と、目の前の人と向き合う真摯な心があるのではないだろうか。

主な取り組み

ヨコミネ式教育

- 『音楽を通じて美しい心を育てる』ことを趣旨に音楽リズム教育
- 子ども達の可能性を高める正課体育教室
- ネイティブスピーカーを招いての正課英語教育
- HIPHOPを取り入れた正課ダンス教育



引用元：毛里田こども園HP

全ての人に佛さまの智慧と慈悲を～著名人も訪れる瑞岩寺

長谷川は誰のために活動をしているのか?どのような人と関わってきたのか?そんな問いかけに、こう語ってくれた。

「“誰のため“というのは特にないんです。ターゲットというのも考えたことはありません。

お寺の理念は『すべての人に佛さまの智慧と慈悲を』。つまり、慈悲・利他・円満です。

自分が幸せになることは他人の幸せにもつながり、他人の幸せが自分の幸せにもつながります」

対象とする人をあえて決めないことで、いろんな人がやって来る。すると、お寺の空気が入れ替わっていくのだという。

そんな瑞岩寺には、多くの著名人が来寺して、コンサートや法話会を開催して

いる。(※著名人紹介(一部抜粋)：鳥越俊太郎さん、水谷修さん(夜回り先生)米良美一さん、他多数)

このような著名人を招いて、コンサートや法話会ができるのはなぜだろうか?質問を投げかけたところ、瞬時に「簡単ですよ!呼べばいいんです(笑)」との返答が返ってきた。

しかし、呼んだところですぐに来てくれるものだろうか?

「好き!好き!光線を送るんです。人は、好き!好き!光線には勝てません。まず手紙を書いて、著書を一緒に送っています。するとほとんどの人が来てくれるんです」

お寺に著名人が来ることで、お寺の価値が上がり評判は良くなる。そして何より一番は、檀家さんたちが喜んでくれるという。

お坊さんになった経歴

～ハワイでのこと

小さな頃からお寺を継ぐというプレッシャーはなく、祖父も厳しい人ではなかった。

駒澤大学仏教学部卒業後は、福井県の永平寺で3年余り修行していた長谷川。お坊さんになると決めたキッカケは永平寺の修行で出会った僧侶に惹かれたからだと言う。

素晴らしい人徳を持つ人に出会うという、大きなものを得た長谷川だが、修行を通じて得たことはもう一つある。

「永平寺にいと、五感が研ぎ澄まされるんです。座禅をしていると、鳥の鳴き声、川のせせらぎ、杉の葉が落ちる音、それしか聞こえなくなるんです。なんどもそれを積み重ねていくと、線香の灰が落ちる音までわかるようになりました。」

生きていくと、情報や悩みや思いが多く、聞こえていないもの見えないものが多い。すべてを削り落とすことで「これでいいんだ」と思えるようになったという。

その後は、東京・東久留米のお寺を経

て、ハワイのパールハーバーのお寺へ赴任した。

ハワイで開教師として過ごす傍ら、日本語学校の校長や各種文化クラブ(お茶・柔道・剣道・空手・カラオケ教室)を主催。

7年半ハワイで住職として過ごした後、実家の都合で日本へ帰国した。

「海外へ行って良かったと思うのは、日本の良さを痛感できたことです。海外にいと、日本のお坊さんがいかに恵まれているのかが分かります。日本人ですから、法話もやはり日本語の方がやりやすいですね。」

現在の活動と今後について

「僕ね、今度、温泉を掘るんですよ。しれっと語る長谷川に、衝撃を受けた。お寺に温泉を掘り、グループホームにしたいと語る長谷川。今までは、すべて別々の施設として作っていたが、一つにまとめることで皆の良いところが出る。『お寺に行けば何とかなる、仲間もいる、生活



もできる」そのような場を作りたいと言う。

「コンセプトは『ごちゃ混ぜ』。障害者福祉・保育園・介護・特別養護老人ホーム(特養)・サービス付き高齢者向け住宅・訪問看護の施設など、お寺に生活経済圏を作ろうと思っています。多様な人とみんなで集まって、お寺を交流できる場にするんです。

行政は税金があればやりますが、特別扱いできない職種でもあります。しかしお坊さんは、お寺に来た人すべてを特別扱えます。お坊さんにしかできないことは絶対あります」

お寺は悲しみや寂しさに暮れる場所ではない。自分は生かされていることに気付く場所。お寺にいろんな人が来て、いろんな出会いに感謝し、笑顔になれるような場所にしたい。

「誰も孤独にさせない」という長谷川は、育児に頑張るお母さんや墓参りで故人を偲ぶ参拝者に「ちょっと休んでいきませんか?」という場所を与えてあげたいという。

(インタビュアー・文)
DIALOGUE TEMPLE 編集長 池谷正明

